

資料番号

5

令和7年6月18日
課 名 教育委員会事務局
秘書広報室
担当者 室長 竹森
内 線 4930

教育長定例記者会見等資料

令和7年6月13日

広島県教育委員会

令和7年度広島県公立高等学校入学者選抜一般学力検査の結果について

- ・令和7年2月26日(水)に実施した、令和7年度広島県公立高等学校入学者選抜「一次選抜」における一般学力検査の結果を取りまとめました。
- ・この結果については、教科指導の参考とするため、県内公立中学校及び高等学校等に配付します。

【一般学力検査結果の概要】

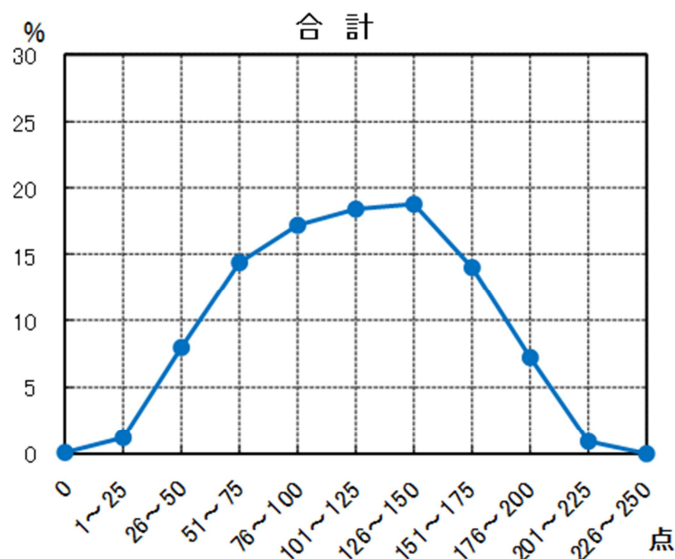
- 5教科の平均点は22.6点（令和6年度は26.1点）

各教科の平均点は次のとおり

教科	国語	社会	数学	理科	英語
平均点（50点満点）	21.4	24.4	19.6	26.2	21.4

- 5教科合計の得点分布は、やや中央が高くなった山形になっている。

5教科に共通した課題として、課題解決の場面で、文章・資料等から読み取るなどして得た情報を、既習の知識や学習内容等と関連付けて考察して、自分の考えをもったり判断したりし、その過程や結果を表現することが十分にできていない点が挙げられる。



I 一般学力検査結果の概要

令和7年2月26日（水）に実施した広島県公立高等学校入学者選抜における一般学力検査について、その概要を取りまとめたので、今後の学習指導の参考としてください。

1 出題について

一般学力検査問題の出題に当たっては、中学校学習指導要領に示された各教科の目標に基づき、分野・領域のバランスに留意するとともに、基礎的・基本的な内容を中心に出題した。また、総合問題や記述問題などを取り入れることによって、思考力、判断力、及び表現力等をみるよう配慮した。

出題の大問数等については、次のとおりである。なお、英語においては、例年どおり実音聴取による問題を出題した。

各教科における設問数

内容	国語	社会	数学	理科	英語
大問数	3	4	6	5	4
設問数	23	23	20	25	22
選択問題	3	13	1	14	13
記述問題等	20	10	19	11	9

* 記述問題等には、漢字の書き取りや選択した理由を併せて記述する設問を含めている。

2 検査結果の概要について

各教科の平均点、標準偏差及び得点分布については、次のとおりであった。

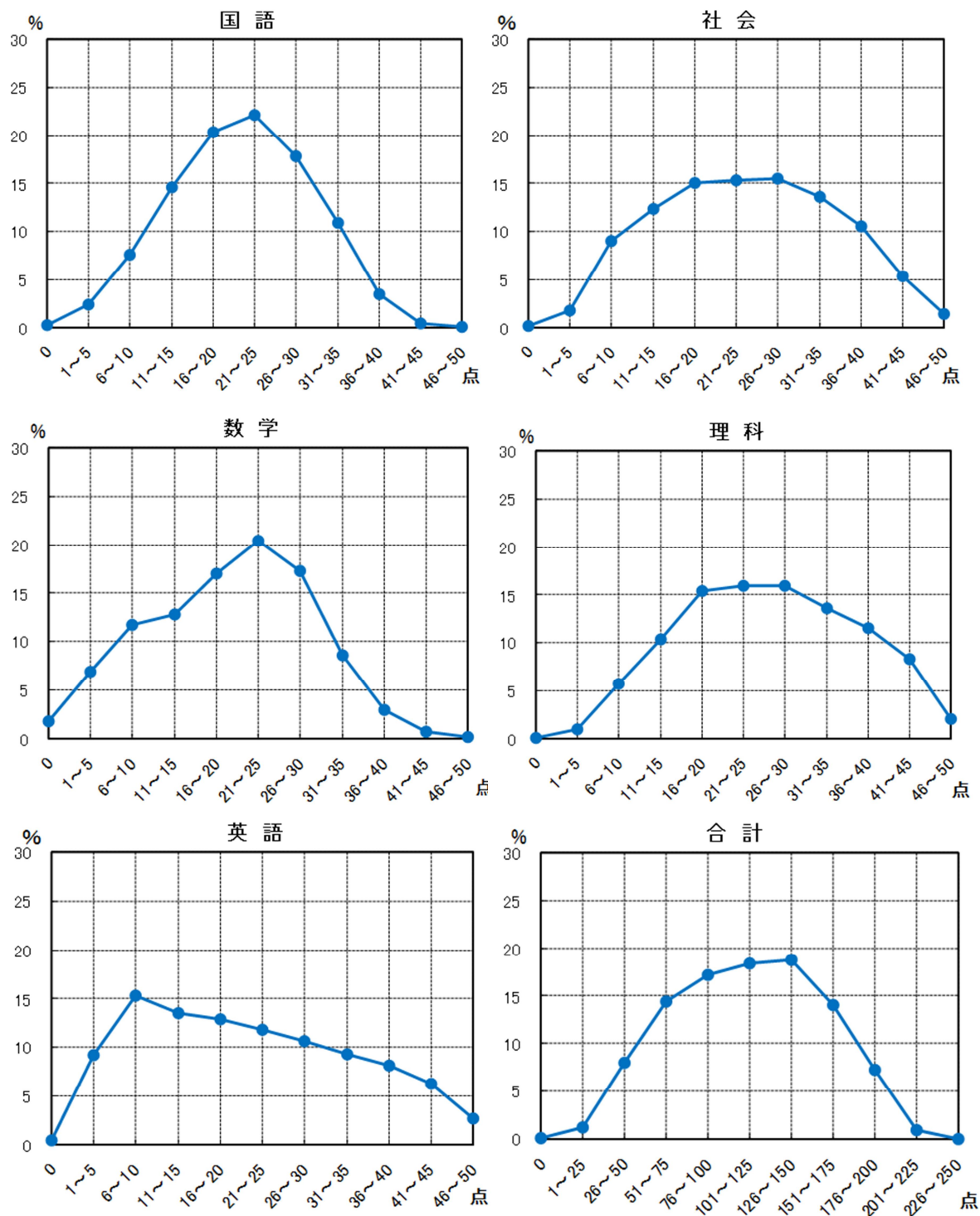
各教科（50点満点）の平均点

教科	国語	社会	数学	理科	英語	5教科平均
令和7年度	21.4	24.4	19.6	26.2	21.4	22.6
令和6年度	29.5	26.9	23.7	26.1	24.1	26.1

各教科（50点満点）の標準偏差

教科	国語	社会	数学	理科	英語
令和7年度	8.3	10.5	9.5	10.4	12.5
令和6年度	8.3	10.1	11.6	10.9	11.9

(各教科の得点分布)



5教科合計について、得点分布の状況を示すグラフの全体の形は、やや中央が高くなった山形になっており、平均点は、単純な経年比較はできないものの、昨年度と比べ下降した。

教科別にみると、国語については、得点分布の全体の形が中央が高くなった山形になっており、平均点は昨年度と比べ下降した。学習を進めていく上での基盤となる

「漢字の読み」と「漢字の書き取り」についての正答率は、それぞれ55.8%、83.0%と「漢字の書き取り」については高いものの、「漢字の読み」については比較的低い。大問別にみると、説明的な文章及び古典についての大問の正答率が比較的低い。

社会については、得点分布の全体の形が台形に近い形になっており、平均点は昨年度と比べ下降した。大問別にみると、地理的分野についての大問の正答率が比較的低い。

数学については、得点分布の全体の形がやや中央が高くなった山形になっており、平均点は昨年度と比べ下降した。今後学習を進めていく上での基盤となる「簡単な数・式の計算」についての正答率の平均は74.9%と高い。領域別にみると、関数についての問題の正答率が比較的低い。

理科については、得点分布の全体の形がやや中央が高くなった山形になっており、平均点は昨年度と比べ大きな変化はない。領域別にみると、「地球」を柱とする領域についての問題の正答率が比較的低い。

英語については、得点分布の全体の形が左側が高くなった山形になっており、平均点は昨年度と比べ下降した。大問別にみると、コミュニケーションを行う目的や場面、状況に応じて、表現内容を工夫してコミュニケーションを行うことについての大問の正答率が比較的低い。

5教科に共通した課題としては、課題解決の場面で、文章・資料等から読み取るなどして得た情報を、既習の知識や学習内容等と関連付けて考察して、自分の考えをもったり判断したりし、その過程や結果を表現することが十分にできていない点が挙げられる。

この点を改善するためには、まず、自然・社会における事象の考察、コミュニケーションの場面などにおいて、目的や状況等に応じて思考・判断したり表現したりするのにふさわしい問いや学習課題を設定して学習指導を行うことが考えられる。そして、生徒が問いや学習課題に答えたり、取り組んだりする過程において、基礎的・基本的な知識及び技能の習得も図りつつ、精査した情報を基に自分の考えを形成し、その過程や結果を文章などによって表現する場面を設けることが重要である。

こうした学習指導を行う上で大切なのは、それぞれの教科の特質に応じた「見方・考え方」を働かせることにつながるような問いや学習課題を設定することである。生徒が学習の過程において「見方・考え方」を働かせながら、知識を相互に関連付けてより深く理解したり、問題を見いだして解決策を考えたり、思いや考えを基に創造したりすることに向かうような学びにしていけることが重要である。こうした学びの過程においては、生徒が自ら学習を調整しつつ、他者と協働して異なる考え方を組み合わせるなどといった、「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実を図ることも大切である。

また、高等学校においても、各教科・科目の目標や系統性を理解した上で、義務教育段階の指導状況や生徒の発達段階、生徒の言語能力の状況を踏まえ、単元の構成や指導の在り方を工夫・改善していく必要がある。